

51 徳川昭武公の『順天堂入院日誌』
について(第二報)

中西 淳朗

昨年の第九十六回総会において、徳川昭武公が突然の血尿をもって発病し、明治四十一年二月二日、順天堂医院に入院、三月四日に右腎の剔出術をうけ、最終的には右腎盂の悪性乳嘴腫症(今日の移行上皮癌に相当)であったという『入院日誌』について報告した。

今回は、昭武公の右腎剔出術の執刀をした阿久津三郎医師について報告する。

阿久津三郎は明治六年十月二十日、福島県相馬郡原の町で元藩医菅野三徹の三男として生れた。順天堂医院にあつて『順天堂医事研究雑誌』の編集にながくたずさわつた菅野徹三の末弟で、明治二十七年四月東京帝大に入學。同年七月元太田原藩医阿久津家の養嗣子となつた。

養父の阿久津資生は佐藤尚中に学び、維新戦争では奥州に赴き、佐藤進と共に戦傷者の治療に當つた。この様なきずなから佐藤進の推薦によつて三郎は資生の養子となつた。三郎は三十一年十二月に医科大学を卒業し、第一医院の外科助手となり、同三十三年一月より順天堂医院に勤務した。

明治三十四年二月、三郎は佐藤恒二、忠雄らと共に渡欧した。ベルリン大学でCasper(輸入管カテーテル挿入法の研究あり)、次いでウィーン大学とZuckerkanndlに学んだ。

明治三十六年に帰国し、順天堂医院に泌尿科を創設し科長となつた。以来、順天堂医院泌尿科は腎臓外科のメッカとして全国から評価された。三郎が明治三十九年までに行つた腎剔出術は二十例に及んでいる。この例数は当時では驚異的な数字である。

明治四十一年医学博士となり、大正五年一月神田連雀町に開業したが、十二年九月一日の関東大震災で病院も自宅も焼失した。

たまたまこの年の秋から慶応義塾大学の北川正惇教授

が渡欧するため、慶応義塾大学の泌尿器科をあずかる形で客員講師となった。

阿久津三郎は大正十二年十月一日から、週三日(月、水、金)出勤し、診療、手術、講義を行った。慶応の泌尿器科第二代教授の田村一は、阿久津三郎先生の如き、全く野にあつた明星を、吾教室に御迎へ出来た事は私学慶応の誇であつた」とのべている。

慶大における泌尿器科学の臨床講義は、阿久津三郎による「血尿」がはじめてで、それは大正十二年の秋に行なわれ、聴講したのは翌年三月卒の第二回生であつたという。

『順天堂誌』を読むと、三郎の性格は極めて円満で世話好きだが、時間と経済観念が不足していたと坂口勇皮膚科性病科々長は評している。

一方、大正三年以来三郎に師事した小山正篤医師(東北医専卒)は、三郎の診療態度を次のごとく書きのこしている。(九泥会誌・昭和七年号、慶大皮泌科教室編)

「患者に対して、先生は自己の御考えを十分に徹底せしめ、その間些の誤解なき様にと随分懇切に説明なさる。

「今迄の私の話がよくわかりになりましたか」と反問なさることもある。さりとして、しきりに勧める、無理に

強いる等のことは一滴の露ほども無かつた。(中略)予め患者に我が意をよく伝へ、之をよく了解せしめ、次に患者の意志を尊重してその自由選択に委せる。然る後に、患者之を欲する場合にその治療に対してベストをつくす。側に控えている私は何時も左様に考へさせられた。」

今日でいうインフォームド・コンセントを阿久津三郎医師はどの患者にも行つていたのであつた。徳川昭武公の『順天堂入院日誌』を読んでも、その点がよく理解できる。

徳川昭武公が順天堂医院に満足し、阿久津三郎医師に深謝して退院したのは、単なる外交辞令ではなかつたと考えられる。

阿久津三郎医師、昭和七年十二月七日、耳性化膿性脳膜炎のため死去。享年六十歳。戒名は隆光院徳潤良温居士、墓地は染井の泰宗寺内(豊島区駒込七の二)にある。

(横浜市・中西医院)